

統一新羅時代の十二神将像

——韓国と日本の十二神将像の比較研究の一環として——

李 鎮 栄

はじめに

薬師信仰はインドにその起源があると考えられるが、インドにおける実態はほとんど不明瞭である。しかし薬師信仰は多様な形で中国、韓国、日本の東アジアに広がっている。それに伴い、薬師信仰に関する美術も、古くからこの三国で隆盛した。

筆者の関心は、薬師如来の眷属である十二神将像についてであり、なかでも古代日本における十二神将像の成立背景の解明にある。従来、古代韓国の十二神将像の存在に関しては不明瞭なままである。修士論文では古代韓国の十二神将像が古代日本の十二神将像の図像成立に関わっていると想定し、その造像の背景などについて考察した。その想定を実証するために、本稿では修士論文の一部を補訂し、古代韓国の十二神将像の存在を明らかにしたい。

1. 十二神将とはどのような尊格か

薬師如来およびその眷属とされる十二神将に関しては、いわゆる漢訳『薬師経』類に窺える。その『薬師経』類は次の四つが現存する。

帛尸梨密多羅訳『仏説灌頂拔除過罪生死得度経』第十二卷、東晋（317年～420年）

（以下、『灌頂経』）

達摩笈多訳『仏説薬師如来本願経』隋（大業十一年、615年）（以下、『薬師如来経』）

玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德経』唐（永徽元年、650年）（以下、『薬師経』）

義浄訳『仏説薬師瑠璃光七仏如来本願功德経』唐（神龍二年、707年）（以下、『七仏経』）

特に帛尸梨密多羅訳『灌頂経』は、一般に他の3つの薬師経とほぼ同じ内容であることから最も古い『薬師経』とされる^①。パキスタン北部のギルギットにおいて、このような『薬師経』

類の梵本が発見されたことや、^②またインド出身の僧侶が薬師信仰に関わっていることから、^③十二神将の起源はインドに求められる可能性はあるが、今のところ、インドでは薬師信仰に関する確実な作例は確認されていない。現存遺例からすれば、インドよりも薬師信仰は東アジアの中で流行したと考えられる。

では本研究の中心となる十二神将はどのような尊格か。『灌頂経』によれば、十二神将は薬師如来を信仰する者を守護する神々である。『灌頂経』には、次のように記される。

今世後世不遭厄難。救脱菩薩語阿難言。如來世尊說是經典。威神功德利益不少。座中諸鬼神有十二神王。從座而起往到佛所。胡跪合掌白佛言。我等十二鬼神在所作護。若城邑聚落空閑林中。若四輩弟子誦持此經。令所結願無求不得。阿難問言其名云何爲我說之。救脱菩薩言灌頂章句其名如是神名金毘羅 神名和耆羅 神名彌佉羅 神名安陀羅 神名摩尼羅 神名宋林羅 神名因持羅 神名波耶羅 神名摩休羅 神名眞陀羅 神名照頭羅 神名毘伽羅救脱菩薩語阿難言。此諸鬼神別有七千以爲眷屬。皆悉叉手低頭。聽佛世尊說是藥師瑠璃^④光。

上に取り上げた箇所は、釈迦如来が薬師如来の功德を褒め称える場面である。この釈迦如来の説法のこの場面で十二神将（十二薬叉）はその説法を聞き、薬師如来を信仰するものを守護すると説かれている。また、十二神将は、それぞれが七千人の夜叉を眷属として率いている。さらに、經典によって彼らの名前は十二神王（十二鬼神）、十二夜叉大将^⑤、十二神将^⑥、十二薬叉大将^⑦とも呼ばれ、このことから彼らの出自が夜叉であることは明からである。彼らのそれぞれの名は、經典によって多少の相違はあるが、梵語を音写していることから、基本的には同一である。

中国の十二神将像は隋時代から登場するが、その殆どの図像は、甲冑をまとい、跪いたまま合掌し、持物に関しては宝珠が確認できる程度である。後述するように、このような特徴は、武器を持ち、岩座に立ち、十二支との習合が見られる韓日の作例と異なる部分が多い点は重要である。中国では注目すべきことに敦煌莫高窟第220窟（642年）の作例に見られるように、十二神将像の頭部に十二支の動物を頂いており、7世紀前半には十二神将像は十二支と習合していることがわかる。

一方、中国では頭に十二支の動物をつけたり、獣頭人身で表される十二支像は早くから造形されており、しかもそれらは墳墓に埋葬用として造形され、いわゆる文官の姿で表されているのである。韓国においても十二支像は同様の使用と造形を示す。これに比べ十二神将像は基本的に甲冑を着け、武器などの持物を持つ、いわゆる武人の姿をとる。両者はともに12体という

ことからしばしば習合は見られるものの、もともとは関係のない両者の図像は明らかに異なるのである。このような状況の中、おそらく、中国で7世紀前半にすでに習合が見られる両者は韓国に渡り、統一新羅の石塔に見られるような獣頭人身の姿で現れていると考えられる。

ところで、韓国の従来の研究では統一新羅時代には十二神将像は存在しないものとされてきた。というのも、埋葬用の十二支像と石塔に現れる作例がいずれも獣頭人身であるため、石塔に現れる作例も十二支像として扱われた傾向が強い。しかし、統一新羅の作例はほとんどが獣頭人身ではあるものの武人の姿で表されることから単なる十二支像とは考え難い。仏塔などに現れる作例は鎧を着用するものが多く、武器を持つなど十二神将像と関係が深い。8世紀以降の石塔の作例がほとんどである統一新羅の作例が武人系の獣頭人身であることは、十二支像と十二神将像とが習合した姿と考えられるのである。

2. 韓国の十二神将像の存在について

先述したように韓国における十二神将研究の一般的見解は、古代韓国において十二神将像は存在しない、ということである。しかしながら、以下に考察するように、その見解は正しくない。

本稿では、統一新羅時代に造像されたと考えられる「蠟石製像」と「慶州博の一具」が十二神将像の遺例であるところを実証することで、その存在を明らかにしたい。

その前に、まず文献資料でその存在を確認したい。『三国遺事』の次の記事によれば、新羅善徳王（632～47）の時代には、すでに『薬師経』が入っていたことがわかる。

善徳王德曼遘疾弥留。有興輪寺僧法惕、応詔侍疾、久而無効、時有密本法師、以德行聞於国、左右請代之。王詔迎入内、本在宸仗外、誦薬師経。卷軸纔周、所持六環飛入寝内、刺一老狐与法惕、倒擲庭下、王疾乃瘳。時本頂上發五色神光、觀者皆驚（中略）。小鬼曰、法師至、将不利、避之何幸、大鬼侮慢自若曰、何害之有、俄而有四方大力神、皆属金甲、長戟来、捉郡鬼而縛去、次有無数天神、環拱而待。須臾本至、不待開経、其疾乃治、語通身解、具說件事。良因因此篤信釈氏（中略）乃奉爐呪香、俄頃五色雲旋遶頂上（後略）。^⑨
（文献一）

また、『三国遺事』には、薬師如来の造像を物語る以下の記事が見出せる。

又明年乙未、鑄芬皇薬師銅像、重三十万六千七百斤、匠人本彼部強古乃末。^⑩（文献二）

又景德皇、遊幸栢栗寺、至山下、聞地中有唱仏声、命掘之、得大石、四面刻四方仏、因創寺、以掘仏為号、今訛云掘石。^⑪（文献三）

すなわち、景德王14年（755）には芬皇寺に重量30万6700斤の銅製薬師如来像を制作し（文献二）、さらに景德王（742～65）年間には、石造四方仏が制作されており（文献三）、実際に、同寺には薬壺を持つ石造薬師仏が残る（図1）。これ以外にも、百済の泰安磨崖三尊仏（6世紀）^⑫の中にも薬壺をもつ薬師如来がうかがえるなど、三国時代から統一新羅までは数多くの薬師如来像と考えられる作例が確認できる（図2）。



図1（左）薬師如来坐像、8世紀半ば、慶州・掘仏寺址、石造、像高206cm、筆者撮影

図2（右）薬師如来立像、百済（6世紀）、泰安・磨崖三尊仏のうち、石造、像高201cm

このように、古代韓国には、文献あるいは現存作例から薬師信仰がうかがえるが、今日に至るまで薬師如来の眷属である十二神将像の存在は認められていない。しかし、後代の高麗時代（918～1392）や朝鮮時代（1392～1910）には十二神将像が確認でき、統一新羅（668～935）時代にのみ、十二神将像が存在しないとすれば不自然に思われる。

さらに、文献一の記事の中、「俄而有四方大力神、皆属金甲、長戟来」という部分が注目される。この記事は、『薬師経』の伝来について述べる箇所だが、大力神が小・大鬼神を捕まえた後、「良図」という人物の病気が治ったとある。しからば、小・大鬼は「行疫神」であり、とすれば大力神は先の『灌頂経』『薬師如来経』に登場する十二神将のことと考えられる。しかも、「皆属金甲、長戟」や「有無数天神、環拱而待」という部分は、十二神将それぞれが七千人の眷属を従えたと述べる『灌頂経』の教説を踏まえたものと考えられる。さらに、「四方大力神」ということから、この頃からすでに方位と関係する尊格との認識であることには留意したい。

特に、この記述は日本に現存する十二神将像を想起させるもので、十二神将の形状を具体的

に記しており、このような形状の十二神将像が実際に制作されていたことを示唆する。

以上のことから、統一新羅時代のみ十二神将像が存在しなかったとは考えがたい。実際のところ、十二神将像が存在しないのではなく、作例があるにも関わらず陵墓に登場する獣頭人身の十二支像と酷似する図像が多いため、混同されたことによって誤解されていたのである。

3. 統一新羅時代の十二神将像の遺例

では、上述の考察を踏まえて統一新羅の十二神将像と考えられる作例について検討していきたい。

(1) 蠟石製十二神将像について



図3 十二神将像、7世紀後半頃、国立慶州博物館・国立中央博物館・檀国大像、面石高さ31.9—40.5cm、蠟石、筆者撮影（慶州博1像は、以下資料（木下亘編『三次元計測技術を用いた新羅王陵石造彫刻の総合的比較研究』奈良県立橿原考古学研究所、2009）

蠟石製像（図3）は、国立中央博物館・国立慶州博物館（以下、慶州博）・龍仁市の檀国大学^⑬校（以下、檀国大）に、計6体所蔵されており、韓国では十二支像とされる（先行研究1つ提示）。中でも檀国大像は、筆者の調査によって今回初めて紹介する作例である。

これらの出土地は、伝金庾信（595～673）墓（もしくは、その周辺）とされ、それ以上は不明である。この神将像について、その図像と用途に注目して検討していきたい。

表1 蠟石製神将像の法量^⑭（単位cm）、筆者作成

像名	①卯像	②午像	③亥像	④慶州博1像	⑤慶州博2像	⑥檀国大像
所蔵先	中央博	中央博	慶州博	慶州博	慶州博	檀国大
高さ	38.1	40.0	40.5	33.5	36.0	31.9
幅	25.6	24.1	23.9	25.2	24.7	23.7
厚さ	10.3	8.8	?	?	10	12

(a) 図像の検討

表1に示したこれらの一群は、一般的に韓国で十二支像とされている。しかし、これらの像は、獸頭人身であることに関しては埋葬用の十二支像と共通するものの、これ以外に、一般的な埋葬用の十二支像として同定できる要素は少ない。すなわち、中国^⑮や韓国の埋葬用の十二支像では、このような図像的特徴を備える作例はまだ報告されていない。しかも、材質が蠟石という特殊なものであることから考えても、単なる埋葬用の十二支像とは考えがたい。

蠟石製像は6体いずれも獸頭人身で、岩座を踏み、鎧や天衣をまとい武装する。これらの点は一葉師寺の十二神将像の作例に類似し、武装の獸頭人身としては醍醐寺本の十二神将像（白描図像、鎌倉時代）と酷似する。このように後世の図像を参考にするならば、これらの図像は十二神将像の可能性をもつゆえ、日本に伝わる十二神将像とそれを説く儀軌類とも比較する必要がある。

① 卯像

盾（六角形）を左手に、右手には火焰剣を持つ。『覚禅鈔』^⑯の薬師十二神に登場する巳像も、手には盾を持つ（図4）。



図4 蠟石製の卯像と白描図像の薬師十二神のうち巳神（平安時代、大正図像第四巻）

② 午像

上半身のみ鎧をつけ、裳をまとい、火焰剣を持つ。岩座に立つ点は、滋賀・龍王寺の午神（鎌倉時代）が裸足で岩座に立つ点で注目される。平安時代に成立した『浄瑠璃浄土標』^⑰をそのまま反映したと考えられる^⑱鎌倉時代の高野山・金剛三昧院本の二十八部衆并十二神将図に見られる午神・亥神と二十八部衆の二十六番目の神将像も裸足の姿で、亥神と二十六番目の神将像は蠟石製像の午像のように鎧に鈴が付いており、刀を持つ。特に、二十六番目の神将像は頭部に午（馬）を乗せている点に注目したい（図5）。



図5 左上から 蠟石製午像、亥神・午神・二十六番目の神将像、竜王寺午神（鎌倉時代、竜王町教育委員会提供）

③ 亥像

猪頭部のたてがみを強調し、左手に刀を持ち、右手は腹部に当て、左向きで髪を逆立たせ、左手に持物（刀）を持つ。京都・広隆寺の珊底羅（1064）と共通点が認められる（図6）。

④ 慶州博一像

両手で持物を持ち、左肩に掛ける。奈良・新薬師寺の伐折羅像を反転させれば、同じような姿である（図6）。

⑤ 慶州博二像

左手に外側から腕を折り曲げた状態で槍を持ち、右手は腰に当てる。奈良・新薬師寺の安底羅像・波夷羅像⑨が同様である（図6）。



図6 （左二枚）亥像と広隆寺の珊底羅、（中二枚）慶州博一像と伐折羅像、（右二枚）慶州博二像と波夷羅像

⑥ 檀国大像

片手に刀を斜めに持つのは、興福寺の作例（11世紀、）宮毘羅像に当てることができ、十二神将像ではよくあらわされる図像である（図7）。



図7 檀国大像と興福寺の宮毘羅像

さて、蠟石製像の持物は、刀が4体、槍・棒状が1体ずつである。奈良・新薬師寺の十二神将像は、刀を持つ像が2体、槍2体、それ以外の持物（棒状の斧・金剛杵など）を持つ像が8体で、4体程度一致し、蠟石製像が6体のみであることを考えると、持物の一致率は高い。また籠手や下半身の鎧と脰の部分の鎧にも蠟石製像に現れる唐草文様が見られ、岩座の形態も似たところが認められる。そして蠟石製像の持物はいずれも、後代の朝鮮時代の十二神将像に見ることができる。

また、儀軌類をみると、やや時代が下るものの、元の沙囉巴（1259～1314）訳の『薬師琉璃光王七仏本願功德経念誦儀軌』（以下、『儀軌』）には、十二支との関連性は述べないが、十二神将の名と身色、持物が記される。特に注目されるのは、黄・白・煙・緑・青・紅色などの方位色²⁰を身色として述べることで、十二支との関係がうかがえる。

この中、宝剣を持つとされる跋折羅・珊底羅は、蠟石製像の午・亥・卯・檀国大像に当てることができる。同様に、宝叉を持つとされる頰髀羅は、蠟石製像の慶州博像2像に当てることができる。また、迷企羅・安底羅・摩虎羅はそれぞれ、宝棒・宝鎚・宝斧を持つとされる。慶州博1像の持物は不明だが、両手の仕草から、斧（鎚・槌）や金剛杵など棒状の持物であった可能性が想定でき、上記記事中の十二神将と比較可能となる。

また平安時代に成立した『浄瑠璃浄土標』からは、刀が3体、槍が1体、棒状の持物を含めてその他が8体²¹であり、蠟石製像と一致する持物が多いことがわかる。

(b). 用途

上述の6体の中で、その用途に関して詳述したい像は⑥檀国大像である。筆者の調査の結果、その重さは18.25kgであった²²。法量は、高さ31.9cm、幅23.7cm、奥行12.0cmであることを考慮すると、岩石の中でも単位面積当たりの密度が高い数値である。このことから、もし頭部まで残存していたら、少なくとも20kgを超えるという想定が可能である。したがって、残りの5体も、重量はそれほど変わらないと推測できる。

蠟石とは、パイロフィライトを主成分とする緻密・軟質で蠟感を持った岩石で、印材、石筆、彫刻材、耐火材として使われる²³。このような蠟石が原材料に選ばれたのは、繊細な彫出が可能で、なおかつ一定の重量に耐えることが条件となる場所に安置される必要があったためであろう。あるいは、薬師信仰と関係する護摩儀式など、火を使う場に置くために、耐火性のある蠟石で作った可能性も考えられる。また、檀国大像は、像の背景になる板の断面の切り目や裏面の処理が、像を刻む前面に比べ荒いことから、側面や裏面は見せない用途として用いられたと想定され、どこかに嵌め込んでいた事がわかる。

したがって、これらの6体は、薬師如来の台座や仏塔（小型）などに嵌め込まれていたことが想定される。先の『三国遺事』密本摧邪条の「四方大神」や後代の『儀軌』の記述からも理解されるように、その配置方法が方角を表す十二支的役割も付随していたため、四角の台座や仏塔の基壇部に、一面に三体ずつ、計12体をそれぞれの方角に合うように嵌めこんでいたと推測できる。

このような作例は、京都・仁和寺の康和5年（1103）作の北院本尊の台座の十二神将像がある。さらに、遡る平安時代のものとしては、記録に残る京都・東寺のもので、創建期（9世紀）の金堂本尊である薬師如来像の台座に取り付けられていたという²⁴。仏塔に使われていたならば、上層基壇部に嵌めこんでいた可能性が想定できる。

さて、蠟石を素材にした仏像は、百済時代である6世紀から7世紀にかけて制作されている。新羅時代以前には見られないため、統一新羅時代におけるこうした蠟石の使用は、恐らく、百済からの影響と推測できる。百済時代に制作された、国立清州博物館所蔵の滑石製²⁵仏菩薩並立像は、材質が同じことで注目される（図8）。



図8 左から蠟石製仏像（百済時代）、亥像、獸文磚（百済時代）、夏見廃寺出土の天王像

さらに蠟石製像の岩（山岳）の表現は、統一新羅時代にも類似表現が見られるものの、むしろ、百済の都であった扶余から出土した山水文磚などに見られる、鋭い山岳や岩の表現が最も近いことが注目される（図8）。ほぼ同様の岩座は、京都・藤井有鄰館の夏見廃寺出土の天王像（飛鳥時代、694年頃）にも認められ、特に両足元の間が丸くくぼむ点は、蠟石製像の午・亥

像に見られるものである。

また、7世紀末頃建立の慶州・羅原里寺址の石塔から発見された、舍利器の表面に浮彫した四天王像は、蠟石製像のように、何れも天衣を長く垂らす。特に、広目天像と檀国大像の鎧の表現はよく似ている。また、この広目天像と亥像は両方とも右手に刀を持ち、左手の手振りも類似する。増長天像が持つ火焰剣の表現は、統一新羅のなかでも珍しいが、午・卯像もこのような火焰剣を手にする(図9)。



図9 左から檀国大像、亥像、慶州・羅原里寺址広目天像、午像、羅原里寺址増長天像

したがって、これら6体の蠟石製像の制作時期は、材質や岩座の表現に、百済から影響が認められることを考慮するならば、蠟石製像は統一新羅(668年～)の初期、7世紀後半まで遡る可能性もある²⁶、最も古い十二神将像と考えられるのである。

(2)「慶州博の一具」像について

慶州の東国大学校・国立慶州博物館と、梁山・通度寺に分蔵される計6体の神将像がある(図10)。この6体は慶州から出土したものであり、今日まで韓国では研究がなされていない²⁷。その理由としては、3箇所に分蔵されているため、これらの6体が一具という認識がなかったこと、またこのような神将像は慶州に数多く残る石塔基壇部に使用されることが多く、特別な神将像として認識されなかったことが考えられる。

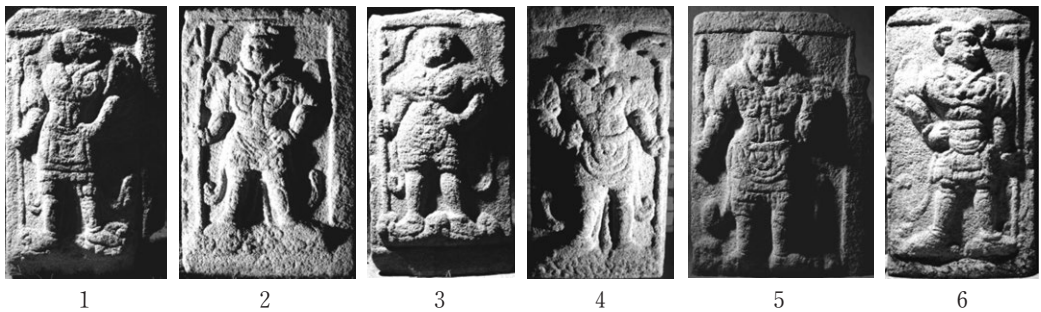


図10 十二神将像(石塔の上層基壇部の部材)、9世紀頃、国立慶州博物館・通度寺・東国大蔵、花崗岩、像高74-82cm(筆者調査)、筆者撮影

ここでは、これらが十二神将像であることを論証したい。そのためには、まずこれらが一具であることを確認する必要がある。

(a) 一具の可能性とその構成

石塔に使用されたと見られるこの6体は、筆者の調査の結果、表2に提示しているように各部分の法量が一致している。ただし、4・5・6像は展示の状態で下縁まで測れないため他の面石の高さに比べ低いが、他の3体のように5～10cmほどあると推測される。

表2 慶州博立像の法量、筆者作成（単位cm）

作例 番号	所 蔵 先	像 高 ()は岩座 まで	浮 彫 深 さ	面 石 高	面 石 幅	面 石 奥 行	面 石 上 縁	面 石 下 縁	面 石 横 縁	面 石 側 面 縁	岩 座 高	岩 座 幅
1	慶州博 1	74 (84)	3	94	50	32	7	9	無	無	10	44
2	慶州博 2	77 (89)	3	96	60	36	6	8	8	9	12	49
3	慶州博 3	76 (88)	3	97	57	37	8	7	10	9	12	44
4	東国大博物館（斧）	82 (94)	3	88	60	35	7	?	9	9	12	49
5	東国大博物館（宝珠）	75 (87)	3	89	44	35	7	?	無	無	12	44
6	通度寺	78 (89)	3	90	50	35	5	?	無	無	12	46

また、右側に縁がある3体、両側に縁がない3体で、構造的な面でも共通する。それぞれの面石²⁸の側面には、統一新羅の石塔に見られる繋ぎ合わせ目²⁹が残る。石塔の上層基壇部は、何枚かの板状の花崗岩を組立式で繋ぎ合わせて造るため、必ずそれぞれの面石の側面にその痕跡が残る。両側に縁がない3体は左右に面石が連続したと想定されるが、両側面平らで、かつ隣り合う面石のみずれないように（摩擦力を高め、固定させるため）、やや粗くノミ痕を残して仕上げています。

一方、右側に縁がある3体は直角に右側の面の面石と繋ぎ合わせるため、縁のある右側面を上方からみると『字型の溝がある。すなわち、上層基壇部の端に配置され、他の面の面石と組み立てるため、組立てられる程度の面積（もしくは、そのような構造）が必要となり、両側に縁がないものに比べその幅は長くなるのである。

さらに、このような構造からは、右側に縁があるものと、直角で他の面の面石と繋がっていたことが想定される。すなわち、左側に縁があるものが3体と、右側に縁があるものと両側に縁がない面石が各3体あったはずである。そうすると、現存する6体と合わせ、計12体となる。これら一具は、東西南北4面に3体ずつが配置され、四面に3体ずつが配置され各面との額縁

のように杵があった可能性が高い。

また、図像的な面でも、この6体は共通する。天衣の表現をみると、6体とも両足の膝の辺りでU字型に折曲がり、いずれの像も左右対称をなす。鎧は首を保護する頸甲・胸甲・腰甲、脛当まで、形状や着用法が6体とも共通する。そして、鰭袖が完全に反転しており、鰭袖の中に規則的に刻まれる縦線の表現も共通点として認められる。また、持物と姿勢をみると、4の東国大像と6の通度寺像はそれぞれ同じ形状の斧を持ち、それと向き合う形で左手は腰に当てる。その他に、慶州博の3体（1・2・3）は、いずれの像も、左手に槍を、右手は腰に当てるなど全く同じ姿である。

以上、この6体はいずれも、法量、像を刻んだ面石の形状、さらに図像が共通しており、石塔の上層基壇部に使用された一具として見なしてよからう。

(b) 図像の同定

では、この一具の図像はいかなるものであろうか。一群は、いずれも雲座に乗り、図像的な面でも大きな差異がないことから、6体とも同格の神将像と認めてよからう。

したがって、この一群は6体以上が一具をなす神将群であると考えられ、まず統一新羅の石塔でしばしば上層基壇部に刻まれる八部衆である可能性がまず考えられる。しかし、多面多臂の阿修羅や獅子冠を被る乾達婆など、明確に八部衆と判断できる図像はこの一具中に認められない。また、統一新羅の八部衆像は坐像で雲に乗るものが多いが、立像で雲座に乗る作例はほとんどない。先に述べたように、この一具に、両側に縁がない作例が含まれることを考え併せると、像は石塔の上層基壇部の一面あたり3体ずつ配置されたと考えられる。一具が八部衆であるならば、上層基壇部では四面にそれぞれ2体ずつ刻まれるはずであり、したがってこの一具は八部衆とは考えがたい。

石塔の上層基壇部に、6体以上で現れる図像は八部衆だけでなく、四天王像と帝釈天・梵天などの組合せもある。この場合は、6体になるのだが、四天王は雲に乗る場合はなく、また帝釈天・梵天の図像も見られない。

結論から言えば、この一具の図像は十二神将像と推測されるので、他の十二神将像の表現形式と比較して同定することが可能と考える。後世の作例だが、高麗・朝鮮時代の薬師浄土図に登場する十二神将像が、すべて雲に乗り、この一具の持つ持物——斧・槍・刀・宝珠など——の表現も高麗・朝鮮時代の作例にはみられる。このように、後世の作例中で十二神将像が雲に乗り、さらに雲の形状まで酷似する点は、この一具（以下、一具として6体を述べる時は、「慶州博の一具」）を十二神将像として同定する上で、重要な図像的特徴と考えられる。では、慶州博の一具の類例を以下に概観する。

慶州博の（1・2・3像）は、左手に槍を握み、右手は腰に当てる点が、奈良・新薬師寺の安底羅・波夷羅像（図11、8世紀頃）と共通する。また、新薬師寺の伐折羅像はその仕草から斧を（両手で）持っていたと推測されるが、慶州博の4・6像も斧を持つので共通点が見出される（図12）。迷企羅・招杜羅像もその仕草から刀を持っていた可能性が高く、慶州博の5像も刀を持っており、やはり共通点と言える（図12）。

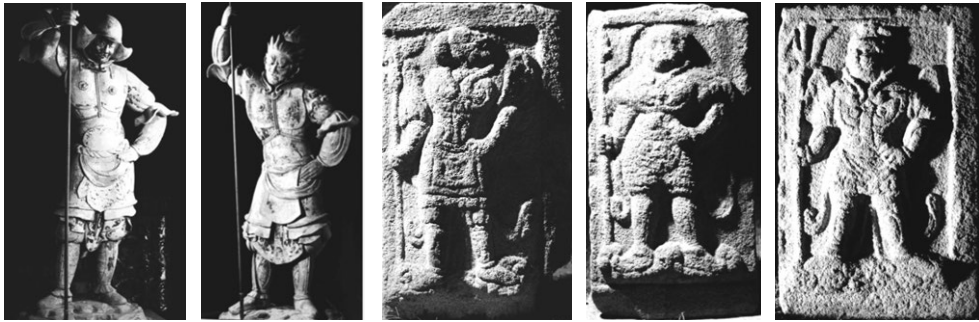


図11(左) 新薬師寺の安底羅・波夷羅像、(右) 慶州博の一具（1・2・3像）



図12(左) 新薬師寺の伐折羅・像迷企羅・招杜羅像、(右) 慶州博一具

特に、浮彫として当初の原形を留める京都・勝持寺の薬師如来像の光背に表された十二神将像（9世紀）の内、槍や刀を持つ像が見られ、慶州博の1具と共通点が見られる（図13）。



図13 薬師如来坐像光背の十二神将像（部分）、9世紀、京都・勝持寺、木造、像高9.1
（奈良国立博物館『檀像』1991、図71）

また、慶州博の一具は、表3に示すように³⁰11世紀頃の興福寺の板彫十二神将像とも、像高や表現場所に共通点が見いだせる。顔向きも慶州博立像が6体のみであることを考えるとその一致率は高い。台座をみると、この6体は雲座、興福寺像は岩坐であり、両方の台座は異なる。

表3 慶州博立像と興福寺の十二神将像比較、筆者作成（単位cm）

作例	時代	像高	顔向き	台座	表現場所
慶州博立像	統一新羅 (9世紀頃)	84—94	左2右3正面1	雲座	石塔の上層基壇部
興福寺	平安時代 (10—11世紀)	88.9—100.3	左6右5正面1	岩座	薬師如来の台座

しかし、興福寺の珊底羅・安底羅・摩虎羅像は、まるで岩の中に足が埋もれているかのようにあらわし、慶州博の1・3像も同じく、雲の中に足が埋もれているようにあらわしている（図14）。また、両者とも慶州博の一具のうち5像、興福寺の真達羅像の一体のみ刀を持ち正面を向く（図14）。そして、左手は持物、右手を腰にあて、右を振り向く因達羅像は、1像と同様のポーズである（図14）。



図14 左から興福寺の珊底羅像・慶州博3像、真達羅像・慶州博5像、因達羅像・慶州博1像

また成立時代と地域が異なることに留意した上で検討すべき文献が『浄瑠璃浄土標』（平安時代）である。

第一宮毘羅伊舍那方可畏大將。其色黄標駕虎。執戰茶劍。右手拳押左腰。或云作東北方
 第三迷企羅阿揭拏方護法大將。其色帶炎上青煙駕龍。執鉦上炎旗二手調之。或云作東南方
 第四安伽羅阿揭多方護比大將。其色帶炎上黄煙駕蛇。執戰茶鉞。左手拳申風指火珠也。或云作南方

第八跋伊羅傳菴荼方狼龍大將。其色白錯駕金翅鳥。左執如意珠。右執金剛鐸。或云作北方。³¹

すなわち、第一宮毘羅は劍（刀）、第三迷企羅は鉦（槍）、第四安伽羅は鉞（斧）、第八跋伊羅は、如意珠（宝珠）を取ると記され、慶州博の一具の中、3体（5像は、刀・宝珠の両方を持つ）の持物と一致するのである。

このように慶州博の一具は、配置構成、後世の韓国の作例、日本の同時代作例や後世の文献などを複合的に考えると、十二神将像であると考えられる。

慶州博の一具は、人頭人身の十二神将像であることに留意するなら、古代韓国の十二神将像がほとんど獣頭人身像であることと際だった差異が認められる。日本で主流となる人頭人身の十二神将像の源流もまた古代韓国に求められる可能性がある点で、重要な作例となるであろう。

また、慶州博には一枚の面石に連続して彫出された3体の人頭人身の武人坐像が所蔵されており（図15）、慶州博の一具と図像的に差異はないことから、この3体も十二神将のいずれかをあらわしたものと考えられる。



図15 十二神将像（石塔上層基壇部浮彫）、9世紀、国立慶州博物館、花崗岩、筆者撮影、
像高 左46cm中52cm右45cm 高さ57cm 幅170cm 奥行29cm

4. 結 び

以上、古代韓国における十二神将像の存在の有無に関して検討を加えた。

蠟石製像のような獸頭人身の作例は今日まで韓国では十二支像とされてきたが、蠟石製像にみられる着甲・持物を有するなどの特徴は、単なる埋葬用の十二支像にはほとんど見られない。このような特徴は、例えば新薬師寺像や醍醐寺本の白描図像（醍醐寺本の像は、蠟石製像と同様の、獸頭人身像である）の十二神将に見出され、加えて『薬師経』の記事などと合わせて考えることで、埋葬用の十二支像というより、むしろ十二神将と見なし得ることを示した。

また人頭人身像としては慶州博の一具があり、この作例は統一新羅時代の石塔に使用されたものである。現状ではこれらの6体が使用された石塔に果たして薬師如来がともに表されていたかは確認できない。しかしながら、これらは、他の石塔では獸頭人身像が多数占める状況の中で、人頭人身の慶州博の一具は、これを十二神将として考えるのに最も有力な作例と考えられる。もちろん、現状では薬師如来の十二神将と言い切れないものの、これからも研究を深める価値のある、極めて重要な作例であることは間違いない。

本稿では「蠟石製像」と「慶州博の1具」の2作例を取り上げた。この他、現存する統一新羅時代の石塔には、獸頭人身像が表わされる例が多く、これらも十二神将である可能性を筆者は想定した。

また、統一新羅期に十二神将像が確認されることによって、古代日本の十二神将像への影響が想定できるようになる。というのも、古代日本の作例は、上述のような韓国の作例と共通点が多く見られ、古代日本の十二神将像の図像に韓国の図像が重要な役割を果たしていたと考えらるためである。

後稿に期したいが、薬師寺や新薬師寺の作例には古代韓国の工人や人々が関与した可能性が

高い。銘文や文献から想定される十二神将像の制作工房（あるいは制作集団）の国籍問題や、制作集団が日本を訪れた歴史的背景を考察し、彼らの伝持した古代韓国の図像・宗教文化などが薬師寺像や新薬師寺像の中に表現されていることを明らかにしたい。

註

- ① 岩本裕『仏教聖典選第六卷大乘經典（4）』読売新聞社、1974、p. 164。
- ② 長尾佳代子「ギルギット本『薬師経』の成立：仏教大衆化の一齣」『パーリ学仏教文化学』7、1994、p. 101。
- ③ 例えば、『集神州三寶感通録』（大正新脩大藏經〔以下、大正〕52、唐 麟德元年（664）、道宣撰）には「撰隋初有天竺僧曇摩掘叉」という記述があり、ここには十二神将像を天竺僧曇摩掘叉が塔の下に安置したという。『灌頂経』の訳者である帛尸梨密多羅（大正21、p. 532中）と達摩笈多は天竺出身と記されており（大正14、p. 401中）、インドを旅行した、玄奘も645年、長安に戻ってから、650年に訳している。『薬師如来観行儀軌法』を訳した金剛智も南天竺（南インド）とされている（大正19、p. 22下）。
- ④ 『灌頂経』、大正21、536上。
- ⑤ 『灌頂経』、大正21、536上。
- ⑥ 『薬師如来経』、大正14、404中。
- ⑦ 『薬師経』、大正14、408中。
- ⑧ 『薬師経』、大正14、408上。『七仏経』、大正14、416中。
- ⑨ 『三国遺事』 密本摧邪条（一然『三国遺事』乙酉文化社、2003、pp. 502—503）。
- ⑩ 『三国遺事』 塔像四、芬皇寺薬師條（一然『三国遺事』乙酉文化社、2003、p. 320）。
- ⑪ 『三国遺事』 塔像四、四仏山・掘仏山・萬仏山條（一然『三国遺事』乙酉文化社、2003、p. 323）。
- ⑫ 釈迦の可能性も指摘されている（姜友邦『世界美術大全集東洋編第10巻高句麗・百済・新羅・高麗』小学館、1998、p. 394）。
- ⑬ 国立中央博物館の二体は、国立慶州博物館からの移管品。
- ⑭ 檀国大の像は筆者が調査した。その外は、次の資料に基づく。有光教一「新たに発見された新羅十二支彫像」『考古学雑誌』第32巻第31号、1942、p. 569；中吉功『新羅・高麗の仏像』二玄社、1971、p. 176；木下亘編『三次元計測技術を用いた新羅王陵石造彫刻の総合的比較研究』奈良県立橿原考古学研究所、2009、pl. 85—100。
- ⑮ 1955～56年の間、陝西省西安唐墓から出土した十二支像（『中国陶俑の美』朝日新聞社、1984、図87）の中、5体が岩座のような台に立つ。
- ⑯ その奥書に文治5年（1189年）であることから成立年代が分かる（中野照男『十二神将像』日本の美術381、至文堂、1998、p. 23）。
- ⑰ 『浄瑠璃浄土標』は十二神将の形状を説くもので、『薬師経』の注釈書といえる。前掲、注⑳中野書、p. 22。
- ⑱ 卷末の奥書によれば、この図像は正慶元年（1332）に融済が高野山一心院内において安祥寺秘本を写したものを、さらに正平14年（1359）9月に高野山不動堂において実専が模写したことがしられる（中野、同上書、p. 22）。
- ⑲ 奈良・新薬師寺の十二神将像の持物は、いずれも後補だが、像の仕草から元来は槍を手にしたことと考えられる。

- ②⑩ 大正.19. 47上一下。
- ②⑪ 大正.19. 67上一中。
- ②⑫ 有光教一「新たに見出された新羅の十二支彫像」『考古学雑誌』第32巻第11号、1942、p. 569。
この論文では、子像（今の中央博の卯像）は重量があることを指摘する。
- ②⑬ 地学団体研究会編『新版 地学辞典』平凡社、1997、p. 1427。
- ②⑭ 根立研介「金堂薬師如来像の台座に取り付けられていた十二神将像」『東寺の十二神将像』東寺宝物館、2002、p. 66。
- ②⑮ 滑石は、蠟石とも呼ぶ。
- ②⑯ 韓国では一般的に8世紀とされ、中吉功氏は7世紀後半と見なしている（中吉功の書 p. 176）。
- ②⑰ 表2の2番の像は、八部衆像として紹介され、慶州邑城（現在の慶州市内）から出土したと紹介されている（黄寿永『新羅の石仏』朝日新聞社、1947、p. 45）。ただし、一般向けの啓蒙書（写真集）の解説である。恐らく、他の5体とも同所から出土し、分蔵されたようである。
- ②⑱ 韓国の石塔に基壇などに使用される、板状の石を指す用語。
- ②⑲ 石塔の上層基壇部で、他の面石と組み立てるための構造。
- ③⑩ 最近では板彫像の年輪年代測定の結果から10世紀まで遡る可能性が指摘されている（三宮千佳「興福寺の十二神将像」『興福寺—美術史研究のあゆみ—』里文出版、2011、p. 134）。
- ③⑪ 大正19、67上中。